

## ユベール・スダーン×船木篤也

## シューマンを語る ③



東京交響楽団の今シーズン定期演奏会に、ユベール・スダーンが選んだメイン・テーマは、シューマン。そこで、このプロジェクトにかける意気込み、それぞれの交響曲に寄せる思いなどを音楽監督みずからに訊ねてみた。

連載・第3回は、本日の演目、交響曲第2番を中心に。

(取材／文：船木篤也)



ふなき・あつや  
1967年生まれ。  
音楽評論家。「読売新聞」で演奏評・CD評を、NHK-FMでクラシック音楽番組の解説を担当。『レコード芸術』『ぶらあぼ』などの音楽雑誌、コンサート・プログラムにも多数寄稿。東京芸術大学ほかでドイツ語講師をつとめる。共著に「魅惑のオペラ・特別版：ニーベルングの指環」(全4巻、小学館)、『地球音楽ライブラリー：ヘルベルト・フォン・カラヤン』(TOKYO FM出版)、共訳書に「アドルフ音楽・メディア論」(平凡社)。

——前回の交響曲第3番《ライン》も素晴らしい演奏でした。シューマンでは、旋律やリズムがいつけん単純にみえても、アクセントが思いがけないところにあたりしますね。そうしたイントネーションが、何よりも美しく表現されていました。

スダーン：オーケストラがみごとにやってくれました。私たちはミュンヘン・ザクセンハウゼンでの公演とサントリーホールでの公演の両方を録音しました。あとで部分の録り直しをする予定だったのですが、その必要はまったくなかった。

——増強されたホルンの迫力もさることながら、室内楽的な細やかさもありません。

スダーン：とくにサントリーでの第3楽章がよかった。あのショパンふうのテンポの揺らぎがね、うまく行った。とても練習したんですよ。

——さて、今回は交響曲第2番。個人的な話になりますが、私にとってこれは、「無人島に持って行くならこれ!」というような曲でして……。

スダーン：(微笑みながら)あの第3楽章があるからでしょう。

——もう最初から最後まで、全部が好きです。ところが、なぜかシューマンの交響曲の中では一番演奏されません。親しみにくい所もあるのでしょうか。第1楽章、テンポの速い主部に入ってから主要主題など、たしかにメロディアスとは言えません。

スダーン：主題というより一個の動機ですね。重みのある点と軽い点が、ひたすら交代するだけ。問いがあって、答えがあるという格好。第1交響曲などは彼のピアノ曲を髣髴とさせますが、ここにはそういうものがない。シューマンはここで初めて独自の道を行っているのだと思いますね。ところで、ヨーロッパではシューマンの交響曲といえば、演奏会でかかるのは第2番か第3番《ライン》ですよ。逆に1番など、まず聴かない。

——それは驚きです。日本での演奏頻度は、3、4、1の順でしょうか。

スダーン：ヨーロッパでは知られ過ぎていくらいです。オーケストラの入団試験のときに、ヴァイオリニストはたいていこの第2番の第2楽章を弾かされますので(笑)。とても難しいですからね。スピッカート(跳弓)ができていますか試されるわけです。いずれにせよ、たしかにシューマンだけでお客を引きつけるのは難しい。だから私もブラームスの協奏曲と組み合わせたのです。第1と第3の冒頭などは、誰もが「すてき!」と思うでしょうが、第2番でいえば、バーンスタインが「ピアノニッシモの一大悲劇」と呼んだ第3楽章。私にとっても、この楽章はシューマンの交響曲のなかで最美のものです。あたかも世界を抱きしめようとするかのような……。第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが非常に高い音へ昇って行ってトリルになるところなど、これは叫びですよ。しかし、最後は諦念がおとずれ、事切れる。ちょうどベートーヴェン



photo by N. Ikegami

《英雄》交響曲の第2楽章のように。このあとに第4楽章をやらないといけないなんて……。

——第4楽章は、それまでのさまざまな主題が去来する、コラージュのような、これもまた大変美しい音楽ですが。

スダーン：私は毎日5、6時間もって、スコアを研究しましたよ。音楽のいわばラインが、どう展開するのかを

知るためにね。第4楽章の冒頭は、まさに爆発です。ものすごいエネルギーです。しかしそれもすぐに消える。終りのほうになって、シューマンは素晴らしいことを書いている。「賛歌」のようになる451小節からです。第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンが3拍子になるのに、周りが依然として2拍子のままだになっている【譜例】。この3と2の動きの衝突ですね。じつはこれは、第1楽章・序奏の、主部に入る直前で、すでにみられたアイデアで、あそこでも3の動きに2の動きが割り込んでいた。この不安定さが、またこの終楽章で持ち込まれるわけです。そしてこれが再びやみ、クレッシェンドの過程を通じて、主題が強調されて終る。見事です。派手に開始したらあとは音階ばかりというケースが多いですから。チャイコフスキーの4番などのように……。



——バッハとの関連もよく指摘されます。第3楽章の主題は、バッハの《音楽の捧げもの》から来ているとも言われます。

スダーン：ええ、それはもう明らかです。彼の灵感の源泉はバッハでした。

——この第2交響曲に着手した頃(1845年)、シューマンは鬱状態にあって、妻のクララと一緒にもっぱら

バッハを研究していました。バッハは「支え」としての意味もあったのではないのでしょうか?

スダーン：第1交響曲のときは、メンデルスゾーンという力添えがあった。しかし、第2交響曲のときは、彼に頼れない。新たな支えが必要だったのだと思います(バッハはメンデルスゾーンが再発見した作曲家でもありますね)。私自身にしても、不安というものがありますよ。シューマンの交響曲を指揮するにあたっての不安がね。モーツァルト管弦楽団を指揮していた1994年から2007年の間は、シューマンを一度も振りませんでした。30歳のときにやったことがあります、ひどいものでした。まったく理解できていなかったのです。それが今や、私にも支えが見つかった。そう、マーラーです。それに加えて、シューマンの前提となるモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルトを演奏してきた経験がある。

——今シリーズで用いているスコアを編んだ、作曲家マーラーですね。マーラーは何を与えてくれますか?

スダーン：マーラーのようなシューマン読みの天才と一緒にいるという安心感です。もちろん、妄信するわけではない。そこでの演奏にスダーンも表れているでしょう。そうでなければ説得力は出ませんから。

——マーラーの編曲は、この第2番ではかなり目立ちます。第2楽章が顕著ですが、第1楽章の出だしからしてオリジナルとは違う。ドとソの信号音を吹くトランペット、ホルン、トロンボーンから、トロンボーンを削り、ホルンからはソに上がる動きを取り除いていますね。

スダーン：そしてホルンだけ、あとでメゾ・フォルテになる(他はピアノニッシモのまま)。マーラーはベートーヴェンの第9なども編曲していますが、もっと目立たない形でやっている。なぜ、シューマンにはこれほど介入したのでしょうか? シューマンは常に助けを必要とする、弱いところのある人だった。そこで強い人マーラーが、「私がひとつ」と思ったのかもしれない。ブルックナーも、どこか自信に欠ける人でした。それで、周りの人がいろいろ書き換えた歴史があります。しかし、現在では本人が書いたとおりにするのが普通です。シューマンに対しても、そうするようになりつつありますが、全体との兼ね合いからうまく行かない所は、私も自分で変更を加えます。マーラーはかなり独自で、とくにこの第2交響曲では作曲し加えたと言ってもいい。ちなみに、第2楽章でマーラーは第1トリオの反復を省略していますが、私はこれを省かずに演奏するつもりです。——どうもありがとうございました。